

## 現代韓国農村家族の形態変動とアノミー —— 全羅北道金堤郡万頃面トジャン里の調査から ——

篠 崎 正 美

### 要 約

1960年代以降、韓国の家族は、いわゆる「圧縮された工業化」の進展過程の中で、形態と機能を大きく変化させてきた<sup>(1)</sup>。しかしさらに、1980年代後半以降の輸出志向産業の成長による高度経済成長と民主化の進展過程で、農村家族においては形態と価値規範の両面で伝統的モデルが崩れているのではないかと仮説される。都市においては、伝統的家族モデルにおける父系血縁中心原理が、男女平等や夫婦中心の近代家族モデルに一部置換されつつあるが、農村では伝統的モデルが崩れた後のアノミー状況が広がっているのではないかと予想される。

1980年代前半の龍頭里での調査によって、李光奎氏は、家族の顕在的行動と潜在的行動のギャップが実際に生じているにもかかわらず、韓国の農村家族では、伝統的家族モデルが強い価値規範の力によって顕在的行動を「拡大」extended することで経済変動過程に適応し調和的發展を遂げていると立証した。本研究は、筆者が韓神大学金周淑氏と共同研究を行なった全羅北道金堤郡万頃面トジャン里の調査の結果を一部再分析し、韓国の農村家族では1980年代後半以降この「調和的發展」モデルは妥当せず、伝統的モデルの解体と、新しい家族生活モデルが導入されていないことによるアノミー状況が生まれていることを実証しようとした。具体的には、農業経営危機、都市への子供の移住による後継者が残らないことからの家族発達周期の実現困難と老後不安、少子化にもかかわらず子供の教育の経済的・精神的コストの増大等による家族問題の顕在化などが見られる。そして世帯主とその配偶者のア

ノミー度において、無力感、人生への疑問、社会的規範喪失感、自己の存在価値感への否定的評価等がより支配的であることが見出された。

## 1. 問題の所在

家族は両性関係と世代関係をめぐる社会組織もしくは社会の構造単位である。

筆者は、東アジア・東南アジアの諸地域の経済開発過程、とりわけ1980年代以降のそれが、家族とその両性関係・世代関係にどのような変化を生ぜしめたかについて、比較社会・文化研究を行ってきた<sup>(2)</sup>。この中で、1992年、韓国女性開発院との共同研究において、首都ソウルの市民の家族意識の調査を行った。この調査結果によれば、ソウルで家族形態の実態としては、「核家族化」が進み、伝統的な大家族形態が減少しており、また家族規模においても小家族化が進んでいるにもかかわらず、「意識」の面では、きわめて伝統主義的に、「家族の範囲」をきわめて大きくとらえる現象が見いだされた<sup>(3)</sup>。

この点は、すでに、韓国の家族社会学者李光奎が、農村家族のインテンシブな調査によって、「価値体系（潜在的文化）」と「家族の行動（顕在的文化）」のギャップとして80年代前半に、指摘している（李，1984）。ただ、李は、このギャップにもかかわらず、「変化という現象が、たとえ韓国の農村地域の深いところで生じているにしても、…アノミーあるいは無秩序といった現象というよりも、変化してきている側面と、変化してきていない側面との調和的發展、あるいは顕在的文化と潜在的文化とのあいだの構造的連関に、より多くの関心をはらう」、「家族を取り扱うような場合、その他の側面とはちがって、構造的継続性は、変化によって生じている結果や問題を理解するのにかかすことができない」と述べ、伝統的な価値観にもとづく基本的な構造原理が依然として保持されていることを強調した。（李，1984，p.210）。李は、家族の発達的周期の理論を用いて、「家族の顕在的变化の内にあらわれている変化は、…むしろ…伝統的な家族システムの拡張ならびに融合としてみえてく

る」ことを強調する。具体的に述べると、地方から単身でソウルに移動し一人暮らしをしている未婚の青年とその郷里の家族は、「拡大核家族」とよばれるべきであり(傍点筆者)、ソウルでかれが結婚し独立した生殖家族を創設した場合、それは郷里にある出自の家族との関係において、「拡大直系家族」と呼ばれるべきだとする。この証左として、李は、異なった場所で生活しているこれらの家族員の、経済的な援助関係や帰省の頻繁さをあげている<sup>(4)</sup>。

たしかに、このような構造的連関は、今日の途上国の家族・親族関係の現象において、程度の差はあれ、かなり普遍的にみることのできる現象であり<sup>(5)</sup>、また、家族と開発との、後者による前者の一方的な影響関係だけでなく、家族のありかた自体が経済開発のありかたに影響を及ぼし得るという意味での双方向での関係を示すものとして注目すべきではあろう。しかしより一般化したレベルで考えるならば、顕在的行動と価値のあいだのギャップは、なんらかの適応的な調整なしには「調和的發展」でなく、価値の崩壊、つまりアノミーを引き起こすであろう。

この問題は、「圧縮された工業化」(渡辺, 1985, 末廣, 1993)を欧米や日本以上の速度で達成しつつある、東アジアや東南アジアの都市と農村の家族のかかえる共通の問題でもある。

本研究では、1980代後半以降の、それ以前をはるかにしのぐ経済開発と社会変動の過程で、韓国の都市家族と農村家族とのこのような、伝統的な価値観に基づくところの相互の一体関係と相互交渉がはたして持続されているのかどうか、持続しうる人々としえない人々という相違が既に生じているのではないか、もしそうであれば、その相違を生み出している要因はなにかということを実証的に考察してみようとするものである。調査は、1993年12月、忠清南道扶余郡林川面トゴク3里(以下F里と略称)と、全羅北道金堤郡万頃面トジャン里(以下K里と略称)において、世帯主とその妻への面接調査によって行った。紙数の制限上、ここでは、主として、K里の調査結果を中心に、家族の形態の変化と家族の範囲に関する意識、アノミー的意識の有無について、調査結果を分析することにした。なおこの調査は、韓国韓神大

学教授、金周淑教授との共同調査として、1993年2月～3月にかけて行ったものである<sup>(6)</sup>。

## 2. 調査結果

### 1) 対象地の概要

韓国の農村、農業の自然条件については、低い耕地率、零細規模経営、水稻中心、二期作の制約という日本と以通った特徴がみられる(鄭, 1992)。しかし、土地基盤の未整備、水利・排水の改善率の低さ<sup>(7)</sup>、増加しつつある小作率など、農業生産力は低く、さらに1970年代以降は、特に輸入拡大により、農家経済は悪化していると指摘されている(鄭, 同上)。兼業農家の比率が低く(1990年に34%)、農産物価格の低迷と兼業所得源の未発達の方で、商品経済の急速な展開や機械化・金肥の導入により、農家の負債が恒常的な農村問題となっている(鄭, 1992, 金, 1985)。

本調査対象地の一つ、全羅北道金堤郡万頃面K里は、このような韓国の代表的な平野地帯に位置する平野マウル(村)である。

図1に示すように、万頃面は金堤市を中心に14ある面(行政単位)のひとつで、金堤市の西北に位置し、万頃江が西海と接している下流の南側にある。管内は金堤一郡山間を通じる国道が走っている。万頃平野は、このような地形のもとで、国内最大の農地改良組合が組織され、その水利事業により早魃被害がほとんどなく、平均的な農村にくらべ恵まれた穀倉地帯であるといえる。面は、全世帯数の65%が農家で、このうち86%が水田稲作、裏作に麦を作る農家もある。平均耕地面積は1.5haで、韓国全体の平均耕地面積1.2haより、やや規模が大きい。

K里は、調査当時の登録された世帯数59、実際に居住する世帯数52であった。

1960年代には、村の戸数は、82戸と多かったが、1960年代からの経済開発により離農が始まり、70年代初めには62、3戸となり、80年代初めまでは60



## 2) 対象者の属性と家族の状況

### A) 年齢・家族構成と家族生活周期

トジャン里・トゴク 3里ともに、世帯主及びその配偶者への悉皆調査を行った。K里の性別・年齢別構成を表1によってみると、60代以上の世帯主が48.1%，50代が17.6%とかなり高齢化がすすんでいる。世帯類型をみると(表2)，拡大家族はK里で17.3%，F里ではわずかに8.5%にすぎず，韓国の伝統的な直系家族・拡大家族が実態として，一人暮らし世帯（そのほとんどが老人）とほぼ同じ比率か，それ以下の割合へと減少している。これに対して，核家族的世帯（完全核家族＋夫婦家族＋単親家族）は，K里・F里ともに，70%を越えている。また，K里では，4戸の単親世帯と夫が出稼ぎで不在の世帯が3戸みられた。

李光奎が，1982年に忠清南道牙山郡炭田面竜頭里の101世帯でおこなった調査の家族構成をみると，28%が直系家族，64%が核家族，9%が単身世帯である。これとくらべて，1992年のK里では，拡大家族が大きく減少し，核家族化が進んだのみならずさらにそれが細分化して，老人夫婦世帯や単親世帯，そして一人暮らし世帯などの比率が高くなっていることがわかる。ちなみに，1993年に，韓国女性開発院が多段階無作為抽出によって行った全国的な農村家族調査の対象者の家族形態の構成比は，表3のようになっており，ほぼ李の行った調査の結果と類似している。対象地の拡大家族の少なさは，この地帯のマウルだけの特徴といえるのかもしれない。

表1 対象者の年齢構成 (%)

年 齢	K 里		F 里	
	世帯主	配偶者	世帯主	配偶者
20歳代	0	0	0	0
30歳代	2 ( 3.8)	8 (15.4)	4 ( 8.9)	6 (13.3)
40歳代	16 (30.8)	13 (25 )	9 (20 )	11 (24.4)
50歳代	9 (17.3)	13 (25 )	10 (22.2)	11 (24.4)
60歳代	17 (32.7)	13 (25 )	15 (33.3)	13 (28.9)
70歳以上	8 (15.4)	5 ( 9.6)	7 (15.5)	4 ( 8.9)

表2 対象者の家族構成 (%)

家族形態	K 里	F 里
単身世帯	6 (11.5)	6 (13.3)
核家族的世帯	37 (71.2)	35 (77.8)
夫婦のみ	12 (23.1)	19 (42.2)
完全核家族	21 (40.4)	16 (35.6)
単親世帯	4 ( 7.7)	0
拡大家族的世帯	9 (17.3)	4 ( 8.9)
計	52	45

表3 全国農村家族調査にみる家族形態の構成

形態	専業農家	兼業農家	非農家	計
核家族	353 (66.9)	125 (59.8)	98 (64.5)	576 (64.8)
一世代	150 (28.4)	27 (12.9)	22 (14.5)	199 (22.4)
二世代	203 (38.4)	98 (46.9)	76 (50.0)	377 ( 2.4)
直系家族	116 (22.0)	65 (31.1)	21 (13. )	202 ( 2.7)
その他	35 ( 6.6)	13 ( 6.2)	14 ( 9.2)	62 ( 7.0)
単 身	24 ( 4.5)	6 ( 2.9)	19 (12.5)	49 ( 5.5)
計	528	209	152	889

資料：한국여성개발원 『농촌가족의 변화와 지속에 관한 연구』 1993

世帯主の年齢別に家族構成をみると(表4)、50歳代以上の場合、拡大家族形態は52世帯中1世帯だけであり、老人夫婦のみ11、老人核家族8、単身世帯3、片親と子2という構成になっている。つまり、農村家族の形態は、実態として、核家族化もしくは、核家族がさらに細分化した夫婦のみや単親、ひとりぐらしなどの世帯へと変わっていることが明らかである。李はしかし、冒頭に紹介したように、家族意識の伝統的な内容、行動への規制力は維持されているのが、韓国の近代化の特徴であると強調している。そして、家族周期発達の韓国的なモデルにあてはめてみれば、一見すると伝統的家族の崩壊にみえる形態変化が、じつは正常な家族モデルの時間的展開にすぎないと強

調している。

李のいう伝統的な韓国家族の発達周期段階は、次の5つのステージを推移する<sup>(8)</sup>。

1) 夫婦家族・・・(0世帯, 0%)

|

2) 核家族・・・(21世帯, 40.4%)

|

3) 直系家族・・・(9世帯, 17.3%)

|

4) 分家を創設する前の既婚の息子たちを有する直系家族(形態としては拡大家族) (0世帯, 0%)

|

5) 純粋な直系家族(不明, 3)を含む)

各周期段階に、K里で実際に該当する世帯数とそのパーセントを示すと、括弧のようになり、李がのべた4)の家族ライフ・ステージが消失していることがわかる。これは、長男が結婚して親と同居後、2、3男も結婚後一時期親と同居し、10年近く拡大家族期(4)の家族ライフ・ステージ)があるという、韓国的な家族生活周期の一特徴がうしなわれたことを意味し、興味深い。これは、1960年代から急速に始まった韓国社会での少子化に原因の一つがあると同時に、都市への就業や就学のための若年期からの移動により、ライフ・コースに変化が生じていることに起因すると考えられる。また、4)の消失は、3)と5)の家族周期段階の区別をも無意味にしている。つまり、この変化こそ、まず経済開発が家族の伝統的なモデルに与えた、一つの特徴的な変化と断言するのである。

家族生活周期に関してみられる第二の大きな変化は、老人夫婦家族周期および、老人単身期の出現である。K里では、上記の5)を経て、さらに6)、7)期にあたる生活周期が顕著である。子供が離家したあとの6)の世帯が52世帯中12世帯を数え、23.1%、核家族期に次ぐ比率であり、老人単身期の7)は5



世帯，9.6%である。

第三の生活周期変化は，父と子，母と子などの単親世帯，伝統的なモデルからすれば逸脱的で例外的とされた形態の出現である。このような形態は，病死や戦死といった原因でなく，むしろ，夫ないし妻の長期出稼ぎ，それを契機にした行方不明，さらには離婚という，やはり社会の経済変動に起因する家族形態の出現である。こうした形態を余儀なくされるということに家族周期発達の韓国的なモデルの推移そのものが阻害され，新しいモデルの必要性が示されているといえよう。

表4は，世帯主の年齢別にみた家族構成であるが，上記2)の完全核家族についても，世帯主の年齢が60歳代と高い世帯が8世帯15.4%もある。これらの世帯では近い将来，すべての子供が結婚後，家を出てしまつて，核家族期からいきなり夫婦家族へと縮小する家族が出現するのではないかと予測される。

表4 世帯主の年齢別家族構成（K里）

形態 年齢	単身世帯	完 全 核家族	単親世帯	夫婦のみ 世 帯	拡大家族
20歳代	—	—	—	—	—
30歳代	—	—	—	—	2
40歳代	1	7	2	—	6
50歳代	2	6	—	1	—
60歳代	2	8	—	6	1
70歳代	1	—	2	5	—

#### B) 世帯規模

K里で，同居の世帯員数は2～4人とばらついており，平均すると3.7人，F里では，2人世帯が40%を占めるが，5人以上の世帯も22.2%とK里にくらべて多く，平均すると4.0人である（表5）。1990年の韓国の都市と農村の世帯規模は，表6に示すようにどちらも平均3.8人以下となっており，経済成

長時代の25年間に、農村の家族規模は、都市における以上に、劇的に縮小している。K里は、ほぼこの傾向を示すマウルであることがわかる。

表5 同居世帯員数 (K里・F里)

下段 %

里	1	2	3	4	5	6	7	8人以上	無回答	計
K里	6	14	9	13	2	3	3	0	2	52
	11.5	26.9	17.3	25.0	3.8	5.8	5.8		3.8	
F里	6	18	4	6	7	1	2	0	1	45
	13.3	40.0	8.9	13.3	15.6	2.2	4.4		2.2	

表6 全国の平均世帯員数

	1966	1970	1975	1980	1985	1990
全国	5.5	5.2	5.1	4.6	4.2	3.78
都市	5.1	4.9	4.9	4.4	4.1	3.77
農村	5.7	5.5	5.4	4.7	4.3	3.79

資料出所：한국여성개발원 『농촌가족의 변화와 지속에 관한 연구』 1993

### C) 親族組織

K里には、52戸中、全州李氏が9戸で最も多く、本貫の異なる金氏が10戸、金提朝氏・林氏・徐氏が各4戸、他に柳氏・伸氏・祭氏・松氏・貞氏・南氏など各氏が混成している。里のなかで、同姓の親族祭祀はなく、全州李氏も派が別なので、時祭りのときも別の場所で行っている。これは、F里が45世帯中の25世帯を安東権氏がしめていて、同姓村であるのと対照的である。ここには、権氏3派がマウル内にそれぞれ宗山、宗水田をもち始郷祭祀をおこなっている。

異姓村であるせいで、K里では、マウル婚（村内婚）が他のマウルより多いし、村内での恋愛結婚の例もみられる。従って、マウル内に、妻の兄弟とか、夫の兄弟とか、婚家間の両親などが比較的多く住んでいる。このような

村の構成から、比較の対象地域として示したF里に比べ、ある程度の緊張感をもって、民主的に話し合いをすすめながらマウルを運営していくという里の性格がつくりだされているように思われる。

#### D) 職業構成・年収と農業経営規模

##### ① 職業構成と年収

世帯主・その妻ともに、F里の方がK里より農業従事者の比率が高い。F里では、専業農家が74%、兼業農家が8%である。F里全体の82%が農業にたずさわっている。K里においても、農家の比率は、F里より10%程度低いものの、なお73.3%が農家である。村人の農業以外のしごとは非常に少なく、世帯主とその配偶者に関するかぎりは、K里では2人の女性が工場労働、男性の1人が自由業でそれ以外は、兼業を含め農業従事である。またK里では、公務員・工場労働者・運転手・自由業などが1人ないし3人あり、女性の専業主婦の割合がF里にくらべて相対的に多い。

世帯の年収は、K里で、世帯の42.3%が1,000万ウォン未満、25.0%が1,000～2,000万ウォン未満、無回答の世帯が26.9%ある。無回答の中には生活保護世帯が17.3%入っている。農家負債の多さ、大きさは開発過程での韓国の農村の大きな社会問題であったが(金, 1992), 最近の女性開発院の調査においても、農家が平均473万ウォンの負債をもっていることが報告されている(韓国女性開発院, 1993)。われわれの調査でも、K里の69.2%, F里の51.1%が「負債がある」としている。K里で負債の多さがめだつ。金額的には、F里の負債は1,000万ウォン以下が78.3%であるが、K里では、負債の約半数が1,000万ウォン以上の多額である。ちなみに、1990年の韓国農家の年間消費支出の平均は、822,7万ウォンと報告されている(韓国女性開発院, 1993, p.185)。

K里で、貧困による生活保護対象世帯は、1種が4戸、2種が5戸であったが、F里には公的保護を受ける世帯はなかった。

農家の経営規模は表7のとおりで、このK里では4000ピョン(坪)未満が約4分の1、4000～8000ピョンが約5分の1、8000ピョン以上が約2割と、

経営規模階層は分化している。これは、2000～6000ビョンのあいだに半数を  
 超す農家があるF里とは対照的である。また夫が出稼ぎに出ている世帯が、  
 K里では3世帯あるが、F里では皆無である。以上の点を、さきに述べた、  
 家族形態の分布や家族生活周期別推移、世帯の人数、職業や収入階層などと  
 あわせて考えれば、同じ水田単一農耕の平野マウルでも、農地の所有規模分  
 布や、同族的結合性の強弱などにより、経済開発が農村家族に及ぼしている  
 影響は、異なっていることがわかる。

表7 K里・F里の農業経営規模別世帯分布

ビョン (坪) 数	K里 %	F里 %
～ 2000	10 (19.2)	5 (11.1)
2000 ～ 4000	5 ( 9.6)	6 (13.3)
4000 ～ 6000	6 (11.5)	14 (31.1)
6000 ～ 8000	5 ( 9.6)	3 ( 6.7)
8000 ～ 10000	9 (17.3)	2 ( 4.4)
10000 ～	2 ( 3.8)	3 ( 6.7)
農地なし	15 (28.8)	12 (26.7)
計	52 (99.8)	45 ( 100)

### 3) 対象者の家族意識

「家族の範囲についての考え方」、「だれまでに教育・養育責任を感じるか」  
 「だれまでを経済的に保障できると考えるか」「老後の介護をだれに頼みたい  
 とかंगाえているか」についての答えをみてみたい。

#### A) [家族の範囲]

表8は、K里の男女別に、「あなたは次のどの人を〈家族〉と考えますか」  
 という問いをたずねた回答である。これによると、次のような特徴が指摘さ  
 れよう。

- ① 同居・別居を問わず、「既婚」の娘を家族と考える割合が、「既婚の息子」

をそう考える割合に対してきわめて低いこと。この点は、とくに、「別居の既婚の息子」にたいして女性の93.3%がかれを「家族」として同一視しているのに、「既婚の娘」にたいしては、わずかに37.8%しかそう考えていないことに端的に示される。もちろん、同居の場合、「既婚の娘」の家族としての同一視は、別居のばあいに比べれば相対的に高い。

表8 「家族」と考える範囲（K里）

同居親族	男性	女性	別居親族	男性	女性
自分の親	100	100	自分の親	94.3	82.2
舅・姑	91.4	100	舅・姑	88.6	93.3
義父母	71.4	77.7	義父母	42.9	40.0
既婚の息子	94.3	97.7	既婚の息子	77.1	93.3
既婚の娘	60.0	68.9	既婚の娘	40.0	37.8
既婚の兄弟姉妹	80.0	73.3	既婚の兄弟姉妹	51.4	33.3
未婚の兄弟姉妹	94.3	84.4	未婚の兄弟姉妹	68.6	48.9
既婚の義兄弟姉妹	54.3	71.7	既婚の義兄弟姉妹	22.9	46.7
未婚の義理兄弟姉妹	74.3	88.9	未婚の義理兄弟姉妹	45.7	62.2
既婚の妻の兄弟姉妹	22.9	40.0	既婚の妻の兄弟姉妹	5.7	11.1
未婚の妻の兄弟姉妹	31.4	46.7	未婚の妻の兄弟姉妹	5.7	20.0
息子の子（孫）	97.1	95.6	息子の子（孫）	85.7	86.7
娘の子（孫）	34.3	57.8	娘の子（孫）	14.3	24.4
父の兄弟姉妹	48.6	62.2	父の兄弟姉妹	17.1	22.2
母の兄弟姉妹	20.0	24.4	母の兄弟姉妹	2.9	6.7
甥・姪	71.4	86.7	甥・姪	37.1	35.6

- ② 上と関連して、同居の場合でも、「娘の子供」である孫を、「家族」として考える割合もきわめて低い。とくに、男性においてこの傾向が強く、わずか34.3%の男性が「同居の娘の子ども＝孫」を家族とみなしているにすぎない。〈父系血縁主義〉を家族の構成原理とする考え方が、一般に強いが、とくにこの意識が男性に強いことがはっきりと示されている。
- ③ 同じく、妻方の同居の親族は、「家族」と同一視される割合は非常に低い。

「母の兄弟姉妹」についても、男性の20.0%、女性の24.4%が「家族」と考えるにとどまる。これも、あきらかな〈父系主義〉であろう。〈同居親族〉という側面より、父系か母系かが重要なのである。

- ④ 同居のばあい、「甥や姪」を「家族」と考える割合は、相対的に高い。同居の「既婚の娘」を「家族」と考える割合よりも、「甥や姪」をそう考える割合より男女ともに高いことは注目される。これは、先に見た、李の伝統的な家族周期モデルの4)、つまり既婚の長男以外に一時期、複数の既婚の息子家族が、親と同居することが一般的であったことをよく反映している。われわれの調査では、既に、この家族形態はまったく見られなくなっているが、人々の家族意識のなかでは、「甥・姪」が「正統な」家族として同居しようという意識が強く残っているのである。

- ⑤ 関連した数字が、「兄弟姉妹」についての男性と女性の意識の違いとして見いだされる。男性のばあい、51.4%が別居の既婚の兄弟姉妹を、68.6%が別居の未婚の兄弟姉妹を家族と考えている。

以上からは、韓国の農村家族における意識が、〈父系血縁主義〉の特徴を強くもつことが示される一方で、男性の「兄弟姉妹」関係を包摂する〈父系血縁主義〉であるという特徴が確認される。つまり、たとえば、かつての日本におけるように、長男だけを家族に残し、他の兄弟を「分家」として結婚当初から排出する、家族モデルではないのである。

これと関連して、「妻の父母」を、同居のばあいはもちろん、別居のばあいにも「家族」として同一視している比率が、男女ともに非常に高いことが注目される。これは、〈父系血縁〉重視とは別の考え方が存在することを示唆する。推測であるが、儒教的な〈孝〉の原理が、配偶者の親に限って、拡大されているのではなかろうか。

## B) 教育・養育責任の範囲

表9からは、娘、息子だけでなく、兄弟姉妹、甥、姪へも、教育・養育責任をもつ考え方があることが示される。男性は、息子と娘に対する考え方で

やや違いがみられる。逆に、女性は兄弟姉妹、甥・姪に対して、男性ほど積極的とはいえない。

表9 「あなたは、家族や親族のなかで、誰までを教育  
と養育の責任を感じますか」(複数回答) %

	男性	女性
息子	97.1	97.8
娘	88.6	97.8
兄弟	62.9	53.3
甥・姪	51.4	46.7
従兄弟	22.9	20.0
人数計	35	45

### C) 経済的保障の範囲

表10は、男性と女性で、経済的保障の範囲の考え方が異なることを示している。女性の方が保障の範囲をやや狭く考えている。

これは、女性自身の経済的能力の低さを反映しているといえよう。しかし、それでも、男女ともに、両親・息子・娘及び娘婿にたいして50%以上の対象者が保障人になるとしている。男性の場合は、兄弟に57.1%, おじまたは甥・姪に40%の人が、保障を行うとこたえており、強い家族・親族の連帯意識を示している。

表10 「あなたは、家族や親族のなかで、だれまでを経  
済的に保障できますか」 %

	男性	女性
両親	71.4	64.4
息子	77.7	66.6
娘と娘婿	68.6	57.8
兄弟	57.1	44.4
おじ又は甥姪	40.0	22.2
従兄弟以外の親族	26.7	17.8
だれもしない	22.9	24.6

## D) 老後の介護をだれに頼むか

表11に示すように、男性の77.2、女性の73.5%が「子供」をあげている。これは、われわれのソウルでの調査とは大きく違う点である<sup>(9)</sup>。ソウル調査では、男女ともに、「配偶者」をあげる人が第一位であった。伝統的な儒教主義にもとづいての扶養期待が、ソウルのような都市では、くずれていることを示すとともに、農村では、家族形態（規模や構成）が都市におけると同様に変化しているにも関わらず、伝統的な意識が強く残っていることを示している。

興味深いことに、男性より平均寿命が長いはずの女性において<sup>(10)</sup>「配偶者」をあげる人が22.2%もあることである。介護のみでなく、経済生活、精神生活の領域においても、農村女性の一部に男性への全面的な依存があることを示すと思われる。

さらに、「娘」や「社会福祉施設」での介護期待がまったくないことも注目される。娘は他の「家族」に属するという非常に強い規範と、介護は私的に行うという二つの規範によるとみられる。しかし表11を年齢別にみると、70歳代では、10人中3人が、「その他の人に世話になる」をあげている、すでに介護問題が顕在化する中で、家族以外を考えざるを得ない状況も生まれていることがわかる。

表11 「年をとって身体的に不自由になった場合、誰に  
世話になりたいですか」（一人だけ） %

	男性	女性
長男	45.7	55.6
他の息子	8.6	6.7
娘	0	0
世話をしたいと言う子	22.9	11.1
配偶者	8.2	22.2
社会福祉施設	0	0
その他	4.0	4.4
無答	10.6	
人数計 (%)	35 (100.0)	45 (100.0)



## 4) アノミー感

以上見たように、たしかに家族形態の急激な変化にもかかわらず、家族意識は、李がいうように相当に伝統型を示している。しかしこの乖離が「調和的变化」であるかどうかを知るために、「アノミー意識」の程度を調べる必要があるであろう。

文化的システムの価値目標に対して、これを内面化した個人が目標達成にむけて自分の行為の有効性が継続的に構造的に阻害されていると感じるとき、制度化された規範の無意味さや、その文脈にいる自分自身の行動や存在そのものの無意味さ、無力さを感じることになる。さらには、価値目標自体への疑念や否定感も生じる。このような意味でのアノミー状況が韓国の農村でどの程度生じているのかを、表12に示すような項目でとらえてみた。

表12 アノミー感（世帯主と配偶者） 下段 %

アノミー項目	1)そう 思う	2)まあ そう思う	3)あまりそう 思わない	4)全くそう 思わない	5)無回答	計
①現在の世の中は、正しい ことと悪いことのけじめ がつかない	7 8.1	56 64.4	17 19.5	0	7 8.0	87 100
②私はこの世でなくてはな らない存在だ	4 4.6	31 35.6	46 52.9	1 1.1	5 5.7	87 99.9
③私はとても生きがいをも っている	5 5.7	47 54.0	33 37.9	2 2.3	0	87 99.9
④人間の価値と幸福は結局 お金が決定する	3 3.4	15 17.2	54 62.1	15 17.2	0	87 99.9
⑤私は一生懸命生きてきた が、最近このようなわた しの人生に疑問を感じる	7 8.0	42 48.3	35 40.2	3 3.4	0	87 99.9
⑥最近わたしはときどき無 力感を感じる	2 2.3	54 62.1	29 33.3	2 2.3	0	87 100.0

「私はとても生きがいをもっている」と答えている人は、約60%ある一方で、

「この世でなくてはならない存在」という認識に肯定的な人は40%にすぎない。そして「自分の人生、生き方への疑問」を過半数の人が心に抱き、「無力感」を感じている人は3人に1人もある。表13は、上記のアノミー項目について、そう思う～全く思わないの4段階の答えにそれぞれ1～4のスコアを与え、各人のスコアの総計をアノミー度としてあらわした場合の、分布状態を示している（6つの項目のすべてに回答した人だけを対象とし、②と③のスコアは他の項目とスコアが逆である）。

この尺度からすれば、スコアが12以下の人は、すべての項目でアノミー的な反応だったといえる。逆に、18以上の場合は、非アノミー的だったと考えられる。仮にスコア13以下を高アノミー、17以上を非アノミー、その中間を前アノミーとみなすと、対象者の約4分の1にあたる24.7%が高アノミー、54.5%が前アノミーと考えられよう。

このようなアノミー感をもたらしている原因は、もちろん単純ではないと思われるが、農村の人々の生活の基本的なよりどころである家族の生活問題との関連を考える必要があるだろう。世帯主への、「農村家族にとって、深刻な生活問題はなんですか」という質問に対して（単純回答）、43.6%が、「経済難」とし、これが最も多かった。次いで「子供の教育」41.0%、この二つは農村で人間の生産と再生産が、非常に困難になっていることを示すといえよう。伝統的な家族の価値観や構造・機能をもって、現在の全体社会システムのなかで、人々が生きていくことの困難さを示しているのである。

表13 アノミー度の分布状況

アノミー・スコア		9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19
男	性	1	1	0	2	6	6	7	8	5	4	1
女	性	0	0	1	2	6	6	8	7	3	0	3
計		1	1	1	4	12	12	15	15	8	4	4
		(24.7%)					(54.5%)				(20.8%)	

〔高アノミー〕のスコアを示した二人の男性の生活状況を概観してみよう。

Aさんは42歳、39才の妻と3人の子供、自分の両親の7人暮らし、典型的な直系家族である。専業農家であり、6450ピョンを自作し、経営規模はマウルのなかでも中以上である。農業に熱心に取り組んできたが生活は苦しい。年収1700～1800万ウォンがあるが、営農資金として3年前に借りた550万ウォンの借金がある。70歳代を超えた両親の扶養と介護の心配、子供の高等学校以上の進学をどうさせるかという心配、先が見えない。かれのアノミースコアは10と非常に高い。

アノミースコア9のBさんは、63歳、妻は61歳で夫婦二人暮らしである。こどもは6人いるが方々に別れて住んでおり、こどもとの行き来は、経済的にも情緒的にもまったくない。妻が病気なので生活保護2級を支給されており、1650ピョンの農地を耕し、年間600万ウォンくらいの収入がある。しかし借金が400万ウォンあり、返せるあてはない。

### 3. 結 び

現代韓国の農村の家族の形態変動と家族意識の実態を、典型的な平地農村での聞き取り調査を通じて明らかにした。およそ10年前に、李光奎が、急速な経済開発と社会変動にもかかわらず、韓国の農村は、伝統的な家族価値の持続によって、アノミー状況よりは、変化への調和的適応をなしているとオプティミスティックに、開発と家族との関係をとらえたが、伝統的であり正常とされた価値を内面化することで、生活問題が深刻化し、無力感や憤りがうまれている側面を、例えばAさんにみることができよう。また、李が述べた、住む場所が同じでなくとも、強い家族の一体感によって、離れ住む家族員と農村に残り住む親との緊密な交流によって、伝統的な家族モデルが「拡大された」(extended)形で存続するという命題も、伝統的な家族生活周期段階の喪失や、少子化や高齢化社会化によりほぼ妥当なくなっている。

1980年代後半からの韓国の農村社会と家族の変動は、それほど深甚である

ことを認識する必要があるように思われる。本稿では、紙数の制約上、他出家族員と農村家族との相互のつながりについて、データを分析できなかった。次稿で試みたいと思う。

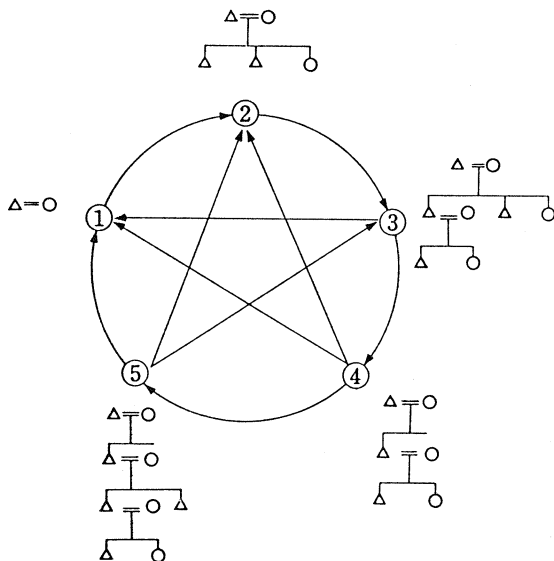
## 注

- (1) E.F. ヴォーゲルは、工業化の技術力を指標に「圧縮された工業化」について言及しているが、渡辺利夫は「工業化の異なる段階」への移行が急速であったと表現しており、内容的には整理する必要があると思われる。
- (2) 「アジアで開発が家族と女性に与えた影響」というテーマで、1990年度から5年間の計画で、アジア女性交流・研究フォーラムが取り組んできたもので、韓国・ソウル、タイ・バンコク、中国・北京と、1980年代以降の経済成長のめざましいアジアの主要な国の首都で、その国の大学または研究機関との共同研究として、家族の生活と意識に関する比較研究をおこなってきた。筆者はフォーラムの研究員としてこの研究プロジェクトを実施。本年度はマレーシアのクアラルンプールで調査を実施の予定。
- (3) 配偶者、親、子供、兄弟姉妹、配偶者の親、孫、配偶者の兄弟姉妹、嫁、婿、兄弟姉妹の配偶者などに対して、半数以上の人がこの人々を「家族」と考えていた。配偶者とこども、かなり低いが自分の親だけを過半数の人が「家族」と考える福岡と非常に違っている。(篠崎・ビュン『日本と韓国の家族意識の比較研究—福岡・ソウル調査を中心に—』, 1992, p.62)
- (4) 李が調査を行った竜頭里では、面接した30中18戸に不在の家族員がいた。かれらのうち、11人が少なくとも年4回、すなわち両親の誕生日と元旦と秋夕（陰暦8月15日）に子供たちが帰ってくる、と述べたことが記されている。また3人はこれより多い頻度で帰省している。さらに、両親による、都市に住んでいる子供への訪問は、これよりもつ

と頻繁である。(李 (韓国における農村家族の変貌の様相) 原ひろ子編『家族の文化誌』1986, p.232~233)

- (5) タイの調査においても、他出している子供の子を、農村の祖父母が養育することは珍しくなかったし、タイ・フィリピン・インドネシア・マレーシアでも、既婚・未婚を問わず、子供からの親への「仕送り」は、半ば家族経済の成立の前提になっている。
- (6) この調査は、首都ソウルでの家族意識調査をフォローするものとして、アジア女性交流・研究フォーラムと金周淑教授との共同研究として行われたもので、全体の報告書が近く刊行される。本稿は、そのデータの再分析であるが、マウルの概要については、金教授が担当した報告書の一部を抜粋して再録している。
- (7) 鄭氏の東アジア学会での報告の際のデータによれば、1992年耕地整理率46.3%、1991年排水改善率は43.5%とのことである。
- (8) 李氏自身が示したモデルは次のような図である。しかし、かれの家族発達周期の記述をより単純化すると筆者の示したモデルになると思われる。この中で、1)のステージについては、新しく結婚した夫婦は、伝統的には、すべて1時期両親の家に住むので、厳密には、家族発達の始期は、夫婦のみでない。その意味で李氏のこの図は誤解しやすい。また、発達する家族の主体が、長男であるのか、2, 3男であるかで、モデルは異なるはずである。

## 韓国家族の発達周期



- (9) 自分自身の老後の世話をだれに頼るかという問に対して、一番多かったのが、「配偶者にたよる」で46.5%を占め、2番目の「子や孫にたよる」の29.7%を大きく引き離している。
- (10) 1990年の男性の平均余命67.4歳、女性75.4歳で、その差は8歳もある。日本の場合は、差は6歳程度であるが、妻の「配偶者をたよる」という割合は、男性の場合より低く、一般的には「平均して夫の方がはやく死亡するため」と理解されている。

## 参考文献

アジア産業研究所 1990『韓国経済・産業データ・ハンドブック』

高鳳京, 李万甲ほか 1960『韓国農村家族の研究』

Kim Joo-Sook 1985 “A Study on the Development of Rural Women in Korea” in Korean Women’s Development Institute, *Women’s Studies*

*Forum*

篠崎正美, ファスーン・ビュン 1992『日本と韓国の家族意識の比較研究  
—福岡・ソウル調査を中心に』

篠崎正美 1993「現代韓国の家族意識への接近」日本家族社会学会編『家  
族社会学研究』第5号

末廣明 1993『タイー開発と民主主義—』

鄭英一 1992「韓国農業の国際化—日本との比較」東アジア学会発表資料

李光奎 1986「韓国における農村家族の変貌の様相」, 原ひろ子編『家族の  
文化誌』

E.F. ヴォーゲル 1993『アジア四昇龍』

渡辺利夫 1985『成長のアジア 停滞のアジア』

徐箕源・盧煥相監修 1986『農村社會構造变化와農協』

한국여성개발원 1993『농촌가족의 변희와 지속에 관한 연구』

한국여성개발원 1990『우리농촌과 여성』

